奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句
令和元年五月度　入選句（投稿総数二千二百六十七句・一般投句数六百十二句）

選者　名和　永山

特選

母一人古飯湯漬啄木忌　宮城県多賀城市　小松　隆夫

「啄木忌」は、四月十三日。したがって「啄木忌」は春の季語。一九一二年（明治四五年）、不遇と貧困のうちに二十七歳の若さで病没した。啄木は『一握の砂』など、作家として活躍したが、決して豊かな生活ではなかった。はたらけど　はたらけど　猶わが生活（くらし）楽にならざりぢっと手を見るは、啄木の暮らしである。

掲句は、その「啄木知る」からこそ生まれた作品と言える。母の一人生活で「古飯に湯漬け」である。古飯とは、残り飯であり、普通ならお茶漬けにしたいところであるが、「湯漬け」なのである。「古飯湯漬」と「啄木忌」が上手く生かされている。

芍薬や少女の深き片えくぼ　愛知県名古屋市　舘野　茂子

「立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花」美しい女性を例える花の一つとしての「芍薬」が用いられている。「芍薬」は、季語として夏である。

さて、「芍薬」と「片えくぼ」を考えてみよう。言われてみればあの花の中心も「ゑくぼ」に見えるから不思議である。しかも「深きゑくぼ」である。そして「芍薬や」と上五で「や」の切字を用いて切っているところに注目をしてみたい。だから、芍薬の花の中心のえくぼだけを意味するのではなく、芍薬の優雅さと少女のあどけなさまで読み込んでいると考えられる。切字の「や」で想像を広くしているのである。

壺焼きや潮たぎらせ客を寄せ　不破郡垂井町　西田　厚堂

「壺焼き」は春の季語である。栄螺（さざえ）を焼くあの光景が「潮たぎらせ」によく表わされている。火に焼かれている栄螺の壺は煮えたぎっている。ちょうど「潮」を煮えたぎらせるように。そしてその香を振りまき客を寄せているというのである。

「壺焼きや」によって、客を集めるだけでなく、さぞかし旨い壺焼きだったろうと想像できるのである。

秀逸

日本に旨き水あり沢わさび　大垣市　吉田　てるみ

麦秋の風と昏れゆく四方の山　大垣市　中山　あや子

余花の雨音なく降りて湖しづか　大垣市　岡田　あや子

このままの暮しで善けれ古茶新茶　大垣市　田中　雅子

蝶縺れ縺れ光と影の中　大垣市　臼井　秀子

三姉妹菜の花御膳おままごと　大垣市　大角　信華

御手洗の龍の口より水温む　大垣市　竹中　美穂子

乙女やや見せる両肩夏の来る　岐阜市　堀江　美州

息しづか茶杓に夏の風掬ふ　大垣市　髙木　歌佐

両の手で円を描きし合格子　大垣市　森　茂寿

入選

点眼へ大口あける四月馬鹿　大垣市　棚橋　みさを

瀬音あるいつもの暮らし花万朶　神奈川県大和市　岩田　爾瑠

かみ合わぬ夫婦の会話おぼろ月　大垣市　宮上　美濃留

若草に座す望郷の念少し　東京都世田谷区　関戸　信治

畦越しに話いつ迄草刈女　大垣市　森川　きよ子

たてがみに風をあそばせ春の駒　養老郡養老町　田中　紫香

膝つきて蓬摘む背に風渡る　海津市　横井　美圭

マネキンの四肢のすらりと更衣　大垣市　野村　多佳子

川風に背泳ぎもあり鯉のぼり　大垣市　本郷　陽子

春愁をかきまぜ飲みぬカフェオーレ　大垣市　新町　恵子

入選

呟きに似て藤房のこむらさき　三重県四日市市　坂山　勝英

年重ね小さく見ゆるランドセル　大垣市　吉村　守眞

メール打つ赤きマニキュア長閑なり　不破郡垂井町　北村　廣美

残り種発芽に五月の陽ざしかな　京都府城陽市　村松　秀一

啓蟄や二重扉がゆるり開く　京都府京都市　八田　弥須子

ぴたぴたと廊下に素足歩み初む　大垣市　北浦　典子

夏立つや雲わき出づる雨後の山　大垣市　久保田　悟義

青嵐に背中押されてプロポーズ　本巣市　土川　楽人

農歌舞伎絶やさぬ村の夏燕　兵庫県神戸市　岸下　庄二

春の風驢馬のパン屋がやって来る　三重県四日市市　藤田　勝民

選者吟

地震つづく地にも新緑御世あらた　永山